

新しい啓示からみた中国と日本における

道徳教育の歴史的ルーツ

マリリン・ヒギンズ

この研究論文は、中国またひいては日本における道徳的考え方の根源とその展開を、中国歴史5000年における概観とハイライト（顕著な出来事）を提示するものである。仏教に多少触れているものの、論旨は孔子とその教えに焦点が当てられ、それが易経(The Book of Changes)紀元前2500年の中国の古典；五経の一つ)にまでさかのぼる歴史的な関連が明らかにされているのと、中国ならびに日本での孔子の教え(儒教)の広がりや歴史的に明らかにされているところにある。深遠で今なお存立している真実を単なる宗教的伝承や迷信から区別するための手がかりとしてバハオラ啓示を用いながら、私のプレゼンテーションが歴史的・精神的な探求への興味をかきたてることを望むものであり、中国の宗教文学に述べられているすばらしい教えを学ぶために、読者を“主の宴”へ招待するものである。

仏教と恩恵と祝福の概念

林 彬子

バハイの聖典や祈りの本には、恩恵、恩寵、御恵み、恵沢といった言葉が多用されている。日本人にとって恩恵、御恵みは何とが判るにしても、恩寵、恵沢は普段使われることも少なく、文字から来る意味はわかって、その言葉の違いや意味が実感としてピンとくるものではない。自然の恵み、恩恵とは言うが、神仏の恩恵とは言わない。

そもそも日本人にとって恩恵とは「棚からぼたもち」という意味での恩恵であり、勞せずして思いがけない幸運にめぐり合うことである。耐えがたい苦難、不慮の死、自然災害の犠牲といった災難さえ恩恵と見なしている、バハオラの言われる恩恵とは意味がだいぶ違っているようである。

西洋では、恩恵に類する言葉が多く使われているようである。日本にこの種の言葉が少ないということは、仏教にその概念が少ないからだろう。そこで、これらの背景を探ってみたいと思う。

仏教の基本的概念

仏教は輪廻やこの世の人生の苦からの解脱を目指して悟りの方法を求めている。

縁起の法：全ての存在は空間的、時間的に相互関連し、因果関係にある。

苦の解決：苦は縁によって生じる。

空：万物は全て因縁によって起こる仮の相で、実体がない。

諸行無常：全てのものはいつまでもそのままではない。

諸法無我：物事には、固定的、実態的な本体(我)がないということ。

一切皆苦：輪廻のこの世そして人生は苦しみに満ちている。

輪廻転生：インドの古くからの生命観で、過去、現在、未来にわたって生死を繰り返し、この生死の輪廻は苦惱に満ちているとされる。

四苦八苦：生老病死、愛別離苦、怨憎会苦、求道得苦、五陰盛苦

四諦：4つの真実